

## 書 評

遠藤由紀子著『近代開拓村と神社 ―旧会津藩士及び屯田兵の帰属意識の変遷―』

御茶の水書房 2008年 286p. 5,600円 (税別)

本書は、著者が2007年3月に昭和女子大学に提出した博士論文「近代開拓村における帰属意識の変遷に関する研究―旧会津藩士および屯田兵と神社の関係から―」に、加筆・修正を行なったものである。著者は、奥付の著者紹介で自身の専攻を「歴史地理学・日本近代史」としており、また雑誌『歴史地理学』への投稿論文もあり(本書第6章所収)、本書を地理学からの宗教研究のひとつと見ることもできよう。地理学の立場から宗教現象に関心を持っている評者には見過ごせない研究であり、紹介のうえ拙評を記しておきたい。

まず「はしがき」で著者は、本書の目的を、近代開拓村における入植者の帰属意識の所在を類型化し、その変遷を明らかにすることとする。そして、神社の勧請から入植者の帰属意識の所在を探ると述べる。次いで、近代開拓村への入植者を(A)旧会津藩士、(B)東北地方から入植した士族屯田兵、(C)全国から入植した士族屯田兵、(D)平民屯田兵の4つに分類し、本書各章の調査内容が要約される。「はしがき」は、次の序章のダイジェストのようになっている。

序章「本書の意義」では、「はしがき」と同じく、本書は、近代開拓村に新たに創立された神社から、そこに入植した旧会津藩士と屯田兵の帰属意識を考察し、彼らがいつからどのように国家への帰属意識を持たされたのかを明らかにすると述べる。また、「近代開拓村における近代国家形成期は、明治維新から日露戦争後までと規定できる理由を明確にすることが、本書の最終的な課題である」(4頁)と記す。上述の入植者の分類説明が繰り返された後、屯田兵村の調査地域として、札幌地域、根室地域、石狩川地域、北見・上湧別地域が挙げられ、これで37屯田兵村のほとんどを網羅するという。3節では、各章の調査内容が概説

される。4節では、本書で用いられる主な史料が紹介されるが、一冊全部を通して使う史料ではなく、地域ごとの個別の史料であるから、それぞれの章に入れるほうがよかったであろう。5節の用語説明も簡単なものであり、別に註で詳述されているので、なくてもよかったですと思われる。

なお、書名にもなっている「近代開拓村」の語について、4頁では「明治期になって形成された開拓村」とするが、5節では「明治国家の拓殖政策によって成立の契機を与えられた村落を指す。主に士族授産村・屯田兵村を指す」(13頁)と説明される。14頁の註1も同様で、本書ではこの意味で使われている。評者は、この分野の研究には疎いですが、このような狭い定義には違和感がある。

次に第1章「従来の研究の動向」では、士族授産の研究、北海道地方史に関する研究、開拓精神の研究、北海道の神社に関する研究の4つに分けて、従来の研究が整理される。北海道の神社に関する研究の節では、北海道の開拓地における神社の創始に、明治政府の要請による官制の神社と入植者によって自発的に勧請された神社の2類型があり、屯田兵村の神社は両者の中間の位置にあると説明される。

第2章「会津藩士と神社」は、本書では異質の部分である。会津藩祖保科正之を祀る土津神社の創建(17世紀)から話が始まり、戊辰戦争中に会津藩士みずからの手によって焼かれたこと、滅藩後に陸奥に斗南藩として再興すると、御神体を斗南に遷宮したこと、廃藩置県後、かつての鎮座地に明治7年から再建に着手されたことが述べられる。そして、寄付金募集をめぐる文書史料から、従来の説とは違って、旧藩士が再建運動を主導していたと指摘される。最後に、旧会津藩士は、かつての藩への帰属意識をいまだに持っていたとま

とめられる。関係史料が引用されているが、掲載の写真で確認すると、読み誤りかと思われる箇所がある（たとえば「象」は「義」であろう）。

第3章「旧会津藩士と神社」の前半は、屯田兵制度の概説である。明治7年の屯田兵例則の制定、明治18年の屯田兵条例の制定、明治23年の条例改正（士族屯田募集の廃止と平民屯田募集の開始）、明治37年の条例廃止、全37屯田兵村の入植年・戸数、屯田兵屋、屯田兵の待遇、当初は募集地域を東北地方に限定したことなどが述べられる。

後半は、札幌地域の屯田兵村のうち、琴似兵村（札幌市）と江別兵村（江別市）が取り上げられる。琴似兵村は最初の屯田兵村で、明治8年に入植が始まった。屯田兵の約4分の1の57名は旧会津藩士である。神社としては琴似神社が勧請された。これは有志が、宮城県亘理藩主初代伊達成実を武早智雄神として祀ったのが始まりで、明治44年には会津藩祖保科正之を合祀したと信じられていたという（実際は合祀されず）。一方、江別兵村は明治11年に入植が始まったが、大部分は明治17～19年に入植した。明治17年までは東北地方の士族が入植し、明治18年からはそれ以外の地方の士族が入植した。神社は、明治23年に江別神社が勧請されたが、諸説と違って、屯田兵幹部が発起して遙拝所を建立し天照大神を祭神としたのが始まりで、明治25年に加藤清正が合祀されたことを史料から明らかにしている。そして、琴似兵村では藩への帰属意識が見られるが、江別兵村ではそうではないとする。この違いの理由を、著者は戊辰戦争に求め、敗者の東北地方出身者のほうが藩への帰属意識が強いとする。しかし、江別兵村では屯田兵の出身地が全国各地にまたがっていることや、明治8年創立とされる琴似神社に対して、江別神社は創立が明治23年と遅いことも考慮する必要があるだろう。最後に、明治18年入植開始の野幌兵村（江別市）の錦山神社（現錦山天満宮）について補足され、主神天照大神の他に加藤清正を祀っていたこと、明治22年に有志が遙拝所を設けたのが始まりであることが述べられる。

第4章「札幌地域における士族屯田と神社」で

は、札幌地域の残りの3つの屯田兵村、すなわち山鼻兵村・新琴似兵村・篠路兵村（いずれも札幌市）が取り上げられる。山鼻兵村は明治9年入植で、入植者はすべて東北地方出身者である。ここが特異なのは、他の屯田兵村と違って、屯田兵村を守護する神社がないことである。著者は、昭和46年まで存在した山鼻神社について探るが、その創立状況は不明のままである。一方、西南戦争戦没者を祀った招魂社（現札幌護国神社）が心の拠り所として重視されていたと推定する。評者の想像では、山鼻兵村は、近くにある札幌神社（現北海道神宮）が、当初は鎮守社的な意味を持っていたのではないかと考える。招魂社は社殿ができるのが昭和8年であり（それまでは碑）、鎮守社的な意味を持つのは、それ以降ではなかろうか。山鼻神社については、明治期の史料に見当たらないということから、それ以後のある時期に、馬頭観音を山鼻神社にしたのであろう。次に、明治20～21年に九州・中国・四国地方から入植した新琴似兵村には、新琴似神社が創立された。明治22年にやはり東北地方以外から入植した篠路兵村には、江南神社が創立されている。主祭神はともに天照大神で、創始は遙拝所だというのが、引用されている文献からは遙拝所と読みがたいところがある。それ以外に、両神社の境内に地神塔があることに注目し、それが徳島県などの習俗であることから、故郷への思いを読み取る。最後に、第3章と第4章をまとめて、同じ札幌地域でも、東北地方出身士族の屯田兵村は藩祖祭神型であり、その他の地方出身士族の屯田兵村は遙拝所型であると分類するが、藩祖祭神型は結局、琴似兵村の一例のみであり、これが特異とも言える。

長くなるので、以下、簡単に要約していく。第5章「根室地域における士族屯田と神社」では、根室地域の東・西和田兵村（根室市）と南・北太田兵村（厚岸町）が取り上げられる。入植年は、前者が明治19～22年、後者が明治23年である。入植者の出身地は全国にまたがる。太田兵村の豊受神社の勧請発起人は屯田兵幹部で、遙拝所の建設から始まった（和田兵村の和田神社は詳細不明）。

それ以外に太田兵村では、旧米沢藩士が上杉神社を勧請するような旧藩主を祀る動きが見られた。しかし、著者はこれを、藩への帰属意識が故郷への帰属意識に変化したものとみなす。

第6章「石狩川流域における士族屯田と平民屯田の神社」では、石狩川流域に形成された4地域（滝川地域、上川盆地、南空知地方、雨竜原野）11屯田兵村を取り上げる。入植は明治22～29年で、士族屯田と平民屯田が混在しており、滝川地域の滝川兵村以外は平民屯田である。屯田兵幹部により遙拝所が建立される遙拝所型は滝川兵村だけであり、上川盆地と南空知地方は屯田兵協賛型、雨竜原野は、開村と同時に記念標が建てられる記念標型とする。そして、遙拝所型→屯田兵協賛型→記念標型と変遷していると述べる。

第7章「北見・上湧別地域における平民屯田と神社」では、北見地域の端野兵村・野付牛兵村・相内兵村と上湧別地域の上湧別兵村・湧別兵村が取り上げられる。入植時期は明治30～31年で、屯田兵制度の終焉期である。北見地域・上湧別地域それぞれに最初に記念標が建てられ、それとは別に各兵村やそれを細分した各区に神社が創立された。著者はこれを、屯田兵村という村落に帰属意識があったと解釈する。

終章「本書の結論」では、屯田兵村の神社の創立由縁が類型化され、①藩祀祭神型→②遙拝所型→③屯田兵協賛型→④記念標型（→⑤村落帰属型）と変遷すると述べる。著者は、これがそのまま入植者の帰属意識の変遷であるとするが、創立由縁と帰属意識は同じではなかろう。入植者との対応関係は、①が、明治初期に移住した旧会津藩士・士族屯田兵、②が、明治10～20年代に入植した士族屯田兵、③が平民屯田兵の入植初期、④が平民屯田兵とする。入植年代は、①が明治初期、②～④が主に明治20年代、⑤が明治30年代になるとする。帰属意識については、①や②の前期は藩にあるとするが、資料終章-1に示されるように②が前期と後期に区分されるのか疑問である（たとえば、明治23年開村の太田兵村が前期になり、それより入植の早い和田兵村が

後期になっているのはおかしい）。また、この資料やここまでの記述に従えば、②の帰属意識は故郷にあるとすべきであろう。⑤では屯田兵村に帰属意識があるが、その裏に無意識に国家への帰属意識があるとする。しかし、この説明は苦しい。そして、近代国家形成期の終焉を、国家に帰属するという国民意識の萌芽がみられる日露戦争後に置くというのが最終的な結論である。

最後に「あとがき」（謝辞と論文初出誌一覧を含む）があり、「参考文献・引用文献」「ABSTRACT」「索引」が付されている。細かいことだが、英文要旨の英語は、きちんとネイティブ・チェックをしていただきたかった。

以上、若干のコメントをはさみながら、長々と紹介してきたように、著者は屯田兵村と神社とを関連づけ、同じ屯田兵村の神社といっても、入植者や入植年代によって違っている状況を明らかにしている。そして、そこから話を、旧会津藩士・屯田兵の帰属意識の変遷や、近代国家形成期の終焉に広げていく。ただし、神社への関心から本書を手にとった評者としては、神社が手段で、帰属意識や近代国家形成期の議論が目的であることには当てがはずれた面もある。

以下では、本書全体に関わる、より大きな問題にコメントしておきたい。ひとつめは、神社の創立由縁の類型化が妥当かどうかという疑問である。一般に類型化を行なう際には、基準が一定している必要がある。本書の場合、①は祭神で規定されているが、②と④は施設、③は創立主唱者、⑤は機能で規定されており、基準がばらばらである。論理的可能性としては、たとえば②遙拝所型で③のように屯田兵が協賛して設立された神社もありうるはずで、実際、野幌兵村の錦山神社はそうである。また、③屯田兵協賛型とされる当麻兵村の當麻神社は、最初は標木が建立されており、④の類型とも言える。分かりやすい祭神を基準にして評者が類型化するならば、①の藩祖型に対して、②は天照大神・故郷神併存型、③～⑤は大部分が天照大神型となるのであろう。実のところ、藩・故郷から国家へという帰属意識

の変遷を言うには、これで十分である。

また著者は、神社の創立由縁が①から⑤の順に変化し、④の後期に⑤村落帰属型が現れると述べるが、帰属意識が藩・故郷から国家へ変化するという大きな流れからすると奇妙である。著者が⑤とする北見・上湧別地域（資料終章-1では、なぜか端野兵村だけ④に類型化されている）は、従来の屯田兵村と違って、それぞれの屯田兵村が3区（野付牛兵村だけ4区）に分かれている。言い換えれば、ひとつの屯田兵村が3つないし4つの集落に分かれている。これが、屯田兵村を代表する神社・記念標以外に各区に神社が創立された大きな理由であろう。各集落に神社があるものを「村落帰属型」と呼ぶとしても（どうせならば「集落帰属型」のほうがよかったか）、明治30年代だから現れた、つまり類型変化の最後という位置づけはおかしいと評者は考える。

入植者の帰属意識（とくにその変遷）を探るのに、神社の祭神や勧請経緯を資料とするのは適切かという疑問もある。帰属意識は年々少しずつ変化する可能性があるのに対し、神社の祭神や勧請経緯からは、創建当時の意識しか把握できない。祭礼の内容ならば、帰属意識の変化に対応して変わることもありうるが、祭神はそう簡単には変わるものではない。本書は、帰属意識の変遷を、同一屯田兵の意識の変遷で検討するのではなく、入植年代の違う屯田兵村の比較で代えているが、これは議論をすりかえているようにも見える。もっとも、屯田兵幹部は、現役を満了すると新設兵村に移ったというから（85頁）、神社の勧請に幹部の意向がはたらいていたとすれば、屯田兵村幹部の意識の変遷と見ることはできるかもしれない。終章で挙げられる旧会津藩士名越源五郎はその例であろう（239～240頁）。しかし、「はしがき」や序章で強調される入植者の帰属意識の類型化は、結局、本書で行なわれているとは思えない（あるのは、神社の創立由縁の類型化である）。帰属意識に本来的関心があるならば、神社にこだわらなくとも、手がかりは他にもあるように思える。

さらに、本書は「帰属意識」を最大の研究テー

マとしているが、その研究意義についても明瞭ではない。近代になって人々が国民としての意識を持つようになることは常識と言っていいものである。そういえば、本書に国民国家やその議論に関する言及がまったくないのも奇異である。

近代国家形成期の終焉を日露戦争後に置くという最終結論に至る手順も、評者には理解できなかった。そもそも、何をもって終焉とするかの基準が不明である。検討された屯田兵村は明治30～31年入植の北見・上湧別地域が最も新しいが（最後の屯田兵村は明治32年入植）、明治36年には屯田兵は解隊される。その後に画期があるというのは、本書での分析が何も意味を持っていないということである。実は、前述のように、序章ですでに、近代開拓村における近代国家形成期は、「明治維新から日露戦争後まで」（4頁）と書いてある。屯田兵村の存続期間を近代国家形成期とする結論が先にありきなのであろうか。

歴史地理学専攻といいながら、地理学的視点あまり感じられないのも残念である。確かに、稚拙ながらも屯田兵村の分布図のような地図は何枚か挿入されているが、概要説明にとどまっている。資料⑦-10のように、屯田兵村における神社の位置が分かる大縮尺の地図がもっとあれば、空間的な位置関係から何か言えることがあるのではなかろうか。また、氏子圏と屯田兵村の空間的関係や神社の祭祀組織と屯田兵村との空間的・社会的関係にも目を向けるべきではないかと感じる。

著者は、今後の課題として、士族授産と神社の関係性を考察したいというが、北海道という地域の問題として考えるならば、屯田兵村や士族授産村だけでなく、それ以外の一般移住者による村ではどうだったのかも気になる。そのような村も北海道にはたくさんあるはずであり、これらの地域の神社についても研究していただきたいと思う。

辛口のコメントばかりになってしまったが、見当違いの点はお詫びしたい。最後に、屯田兵村やそこでの神社創建については、ずいぶん勉強させていただいたことを記し、今後の研究の進展をお祈りする。（小田匡保：駒澤大学）